

東京女子大学図書館所蔵 伝二条為兼筆 『古今和歌集』翻刻稿(一)

東京女子大学古典文学研究会

一、はじめに

古典文学研究会では、本学図書館所蔵の二条為兼筆と伝えられる『古今和歌集』古写本の、翻刻および調査を行っている。

後に掲げる極書では、本学古今和歌集は鎌倉末期書写とされ、反町茂雄氏の手になるとみられる売札によれば、本文は定家本系統、中でも貞応本系統に近しいということである。これにより本研究会では、本学本と定家本系統との距離を探るべく、貞応本系統・嘉禄本系統・伊達家本の三系統の写本と校合を進めている。その際使用した影印は以下の通りである。

貞応本系統

「貞応二年本」(『冷泉家時雨亭叢書第二巻』所収)
嘉禄本系統

「嘉禄二年本」(『冷泉家時雨亭叢書第二巻』所収)
伊達家本

「伊達家旧蔵藤原定家筆本」、『古今和歌集 伊達本』久曾神昇編) また、本学本の本文が右のいずれとも異なる場合には、久曾神昇氏『古今和歌集成立論 資料編』、西下経一・滝沢貞夫両氏『古今集校本』、小松茂美氏『伝公任筆 古今和歌集 図版編』をもとに、元永本・雅経本・前田家本(清輔本系統)・昭和切(俊成本系統)・伝公任筆本とも校合した。

本稿では、本学古今和歌集の書誌および、仮名序・巻一―三までの翻刻、右の基準で調査した定家本はじめ他系統の本文との異同を載せる。なお、巻四以降の翻刻および異同は、次号以降に順次掲載する。

二、書誌

上下巻二冊。他に折紙(極書)、添付文書二種、売札が、新しいものとみられる一箱に納められている。

上巻

〔大きさ〕

縦 24・5 センチ 横 16・0 センチ

〔外題〕

題簽 縦 15・6 センチ 横 3・2 センチ

墨書にて「古今和歌集上」

内題無し

〔本文〕

界高 (上) 3・4 センチ (下) 1・4 センチ

一紙 9 行、一行およそ 16 字

初めに二丁、終わりに二丁遊紙有り。

5 枚一折、計 12 折の綴葉装。^{注 1}一枚目は前に組み込まれ表紙となる。

下巻

〔大きさ〕

縦 24・7 センチ 横 16・4 センチ

〔外題〕

題簽 縦 15・7 センチ 横 3・1 センチ

墨書にて「古今和歌集下」

内題無し

〔本文〕

界高 (上) 3 センチ (下) 1・5 センチ

一紙 9 行、一行およそ 16 字

初めに二丁、終わりに三丁遊紙有り。

真名序の前に一枚、墨消歌の前に半丁白紙。

5 枚一折、ただし巻二十の途中より真名序にかけて 3 枚一折。計 14 折の綴葉装。

上下巻いずれも、朱にて勅物・イ本注記あり。いずれも巻頭ごとに、原付箋(跡含)あり。奥書はいずれもなし。

折紙

全 縦 38・7 センチ 横 52・5 センチ

半 縦 19・2 センチ

包紙 縦35センチ 横46・5センチ

添付文書

縦約29・5センチ 横約19・0センチ

添付文書

縦23・5センチ 横32・5センチ

三、極書、その他添付文書、売札

各翻刻は以下の通り。

1. 極書

古今和歌集 上下式冊

右

二條家為兼卿真跡

分明也最珍奇之鴻宝也

應需為後證染禿毫

記

元禄六曆

古筆了珉

孟秋日 (落款・花押)

2. 添付文書

古今集

二条為兼卿筆

古筆了眠掛紙

墨付百拾四枚

外五枚白紙表紙共

掛目百七拾一匁五分

墨付百三拾壹枚

外七枚白紙表紙共

掛目百八拾小匁四分

3. 添付文書

二條家系統

定家卿^一 為家卿^二 為教卿^三

為兼卿^四

藤原為兼八為家の孫為教の子なり

正應中從二位權中納言二至る尋で

正二位に進み永仁中事に坐して佐渡

に流さる嘉禎元年召し還さる

延慶三年權大納言に任ぜらる正和二年

薙髪して名を蓮覚と更たむ應長の初め伏見上皇の勅を奉じて

玉葉和歌集を撰す元弘二年

薨去 大日本史を写す

元弘二年大正六年迄五百八十六年

永仁六年北條貞時藤原為兼ヲ流ス

原稿用紙に書かれている。内容より察するに大正六年頃書かれたか。

4. 売札

9 古今和歌集伝二条為兼筆鎌倉末期古写本

二帖 二、〇〇〇、〇〇〇円

四半本、胡蝶装。墨付紙数、上巻一一四枚、下巻一一一枚。和

歌一首二行書き。上巻巻首に仮名序、下巻末に真名序と墨滅歌あ

校合及び

り、本文中に朱筆の声点・勘物等がある。テキストは大体定家本

の系統に属するが、嘉禄本よりも、むしろ貞応元年本・貞応二年

本・伊達家本に合する個所が多い。但し巻第十一などは、定家本

とやや異つて、元永本その他の古本と一致する個所も見られる。

書は美しく、添付の元禄六年の古筆了珉の折紙には、「二条家為

兼卿真跡分明也」云々とある。ほどその時代、即ち鎌倉末期のもの。

金欄表紙、美装箱入。保存良。

ほぼ同じ文が、本学本とみられる写真と共に、『弘文荘善本目錄』

（一九七七刊）に掲載されている。

四、凡例

（1）本学所蔵古今和歌集（以下、底本と呼ぶ）を忠実に翻刻した。仮名遣い・漢字の当て方もすべて底本に従った。

（2）改行は底本のままに行った。空白は底本の様子をできるかぎり再現するように努めたが、詞書は二字落し、左注は三字落しで統一した。作者は、底本の様子に従い、適宜記した。

（3）朱筆部分は で囲った。声点・合点も全て朱筆であるが、これらはそのまま本文に記した。

（4）声点は、研究会の判断により、該当すると思われる箇所にて示した。

（5）底本は仮名序に古注をもたないが、便宜のため諸本に古注のある箇所を で示した。

（6）帖数及び表・裏は、一帖表を【一才】同裏を【一ウ】の形で示した。

(7) 各歌の冒頭に、『新編国歌大観』番号を付した。

(8) 誤脱や摺り消しの跡と思われる箇所は、その旨、脚注に記した。

(9) 他本との異同は、以下の項目ごとに記号で分け、その記号を該当箇所の脚注に記した。異同内容は、翻刻の後の「異同一覧」に同じく項目ごとに分けて列記した。

…孤例

…定家本系統三本と異なるもの

…定家本系統三本の間で揺れのあるもの

弧例との判断は、『古今和歌集成立論』『古今集校本』および『伝藤原公任筆 古今和歌集』に照らしてのものである。定家本系統三本と異なるものについては、原則として他本との一致は示さないが、元永本・雅経本・前田家本、昭和切、伝公任筆本のいずれかと一致する場合のみそれを示した。

また「異同一覧」で挙げる各伝本の名称は、以下のように省略した。

貞…貞応本（定家本系統）

嘉…嘉禄本（定家本系統）

伊…伊達家本（定家本系統）

元…元永本

雅…雅経本

前…前田家本（清輔本系統）

昭…昭和切（俊成本系統）

公…伝公任筆本

五、翻刻

【一才】

やまとつたは人の心をたねとしてよ
ろつことのはとそなれりける世中
にある人ことわさしけきものなれは心に
おもふことを見るものきくものにつけて
いひいたせるなり花になくうくひす水
にすむかはつのごきをきけはいきとし
いけるものいつれか哥をよまさりける
ちからをもいれすしてあめつちをうごかし
しめに見えぬおに神をもあはれとお

【一ウ】

もはせをどこをむなのなかをもやは
らけたけきものゝふのこゝろをもなく
さむるは哥なりこの哥あめつちのひら

けはしまりける時よりいてきにけり し
かあれとも世につたはることはひさかたの
あゝめにしてはしたてるひめにはしまりあ
らかねのつちにしてはすさのをの御子と
よりそおこりけるちはやふる神代には
哥のもしもさたまらすすなほにしてこ

【二才】

との心わきかたかりけらし人の世となり
てすさのをの御ことよりそみそもしあ
まりひともしはよみける かくてそはな
をめてとりをうらやみかすみをあは
れひ露をかなしふころことはおほく
さまくになりけるとをきところもい
てたつあしもとよりはしまりてとし月
をわたりたかき山もふもとのちりひち
よりなりてあまくもたなひくまでおひの

【二ウ】

ほれることくこの哥もかくのことく
なるへしなにはつのうたは御門のおほむは
しめなり あさか山のこととはうねめの

たはふれよりよみて このふた哥はうた
のちうはうのやうにてそてならぶ人のはし
めにもしけるそもく哥のさまむつ
なりからの哥にもかくそあるへきそのむ
くさのひとつにはそへ哥おほささきの
御門をそへたてまつれる哥

【三才】

なにはつにさくやこのはな冬こもり
いまははるへとさくやこの花といへなる 「いへ」の下「脱か。
へしふたつにはかそへ哥
さくはなにおもひつゝみのおちきなさ
身にいたづきのいるもしらすてといへるな
るへし みつにはなすらへ哥
君にけさあしたのしものおきていなは
こひしきことにきえやわたらんといへるな
るへし よつにはたとへ哥

【三ウ】

わかこひはよむともつきしありそ海の
はまのまさこはよみつくすともといへる
なるへし いつゝにはたこと哥

いつはりのなきよなりせはいかはかり
人のことはうれしからましといへるな
るへし　むつにはいはひ哥

このとはむへもとみけりさきくさの
みつはよつはにとのつくりせりといへる
なるへし　いまのよのなかいろにつき人の

【四才】

こゝろはなになりにけるよりあたなる
哥はかなきことのみにてくれはいろこの
みのいへにむもれきのひとしれぬことゝな
りてまめなるところにははなすゝき
ほにいたすへきところにもあらずなりに
たりそのはしめをおもへはかゝるへく
なむあらぬいにしへのよゝの御門春の花の
あした秋の月のよことにさふらふ人ゝを
めしてことにつけつゝ哥をたてまつ

【四ウ】

らしめ給あるは花をそふとてたより
なきところにもとひあるは月をおも
ふとしてゐるへなきやみにたとれる心ゝを

見たまひてさかしおるかなりとしろし
めしけむしかあるのみにあらずさゝれいし
にたとへつくは山にかけて君をねかひ
よるこひ身にすぎたのしひこゝろにあ
まりふしのけふりによそへて人をこ
ひ松むしのねにともをしのひ高砂住江の

【五才】

松もあひをひのやうにおほえおとこ山の
むかしをおもひいてゝをみなへしのひとゝき
をくねるにも哥をいひてそなくさめ
ける又春のあしたに花のちるを見秋の
ゆふくれにこのはのおつるをきゝあるは
としことにかゝみのかけにみゆる雪と浪
とをなけきくさの露水のあはを見て
わか身をおとろきあるはきのふはさかえを
こり時をつしなひ世にわひしたしかりしも

【五ウ】

うとくなりあるはまつ山のなみをか
け野中の水をくみ秋はきのした葉
をなかめあかつきのしきのはねかきを

かそへあるはくれ竹のうきふしを人に
いひよしの河をひきて世の中をつらみ
きつるにいまはふしの山もけふりたゝす
なりなからはしもつくるなりときく人
は哥にのみそこゝろをなくさめけるいに
しへよりかくつたはるうちにもならの御

【六才】

時よりそひろまりにけるかの御やや哥
のこゝろをしろしめしたりけむかのおほ
むときにおほきみつのくらゐかきのも
とのひとまろなむ哥のひしりなりける
これはきみも人も身をあはせたりといふな
るへし秋のゆふへ龍田河になかるゝもみち
をは御門のおほんめににしきと見たまひ
春のあしたよしのゝ山のさくらは人まろか
こゝろにはくもかとのみなむおほえける又山の

【六ウ】

へのあか人といふ人ありけり哥にあやし
くたへなりけり人丸はあか人かかみにたゝ
むことがたく赤人はひとまろかしもにたゝん

ことがたくなむありける この人ゝをおき
て又すぐれたる人もくれ竹のよゝにきこ
えかたいとのよりゝにたえすそありける
これよりさきの哥をあつめてなむ万
えうとなつけられたりけるこゝにいに
しへのことをも哥の心をもしれる人わ

【七才】

つかにひとりふたりなりきしかあれとこ
れかれえたところえぬところたかひに
なむあるかの御時よりこのかたとしはもゝと
せあまり世はとつきになんなりにけるいに
しへのことをも哥をもしれる人よむ人お
ほからすいまこのことをいふにつかさくら
ゐたかき人をはたやすきやうなれはいれ
すそのほかにちかきよにそのなきこえた
る人はすなはち僧正遍昭は哥のさまはえ

【七ウ】

たれともまことすくなしたとへは氣に
かけるをつなを見ていたつらにこゝろを
うこかすかことし 在原のなりひらはその心

あまりてことはたらずしほめるはなの色
なくてほひのこれるかことし 文屋のやす
ひてはことほゝたくみにてそのさまみに
おはすいはゝあきひとのよきゝぬきた覧
かことし 宇治山の僧きせむはことはかすか
にしてはしめおはりたしかならずいはゝ秋

【八才】

の月を見るにあかつきのくもにあへるか
ことし よめる哥おほくきこえねはかれこれ
をかはしてよくしらすをのゝこまちはいに「をかの下よ」脱が
しへのそとおりひめの流なりあはれなる
やうにてつよからすいはゝよきをうななや
めるところあるにたりつよからぬはを「をの下う」等の脱が
なのうたなれはなるへし 大伴のくるぬし
はそのさまいやしいはゝたきゝおへる山人
の花のかけにやすめるかことし このほかの

【八ウ】

人ゝそのなきこゆるのへにおぶるかつらの
はひひろこりはやしにしけきこのはのこ
とくにおほかれと哥とのみおもひてそのさ

ましらぬなるへしかゝるにいますへらきの
あめのしたしろしめすことよつの時こゝの
かへりになむなりぬるあまねきおほむう
つくしみのなみやしまのほかまてなかれひろ
きおほむめくみのかけつくは山のふもとより
もしけくおはしましてよろつのまつりことを

【九才】

きこしめすいとまもろゝのことをすてたまは
ぬあまりにいにしへのことをもわすれしふりに
しことをもおこしたまふとていまも見そなは
しのちのよにもつたわれとて延喜五年四月
十八日に大内記きのともり御書のところのあ
つかりきのつらゆきさきのかひのさう官おふ
し河内のみつね右衛門の府生みふのたゝみ
ねらにおほせられて万えうしうにいらぬふ
るき哥みつからのをもたてまつらしめ給

【九ウ】

ひてなむそれかなかにむめをかさすよりは
しめてほとゝきすをきゝもみちをゝり雪
を見るにいたるまで又つるかめにつけて

君をおもひ人をもいはひあきはき夏くさ
を見てつまをこひあぶさか山にいたりて
たむけをいのりあるは春夏秋冬にもいら
ぬくさゝの哥をなむえらはせたまひける
すへて千哥はたまきなつけてこきむわ

かしうといふかくこのたひあつめえらはれて

【一〇才】

山した水のたえすはまのまさこのかすおほく
つもりぬれはいまはあすか河せになるうら
みもきこえさゝれいしのいはほとなるよろ
こひのみそあるへきそれまぐらことは春の花
にほひすくなくしてむなしきなのみ秋のよの
なかきをかこてれはかつは人のみゝにおそり
かつは哥のこゝろにはちおもへとたなひく雲
のたちぬなくしかのおきふしはつらゆきらかこの
世におなしくむまれてこのことの時にあへるをなん

【一〇才】

よろこひぬる人まろなくなりたれと
「なく」衍字か。
哥のことゝとまれるかなたとひ時つづ
りことさりのしひかなしひゆきかふとも

この哥のもしあるをやあをやきのいとたえ
すまつの葉のちりうせすしてまさき

のかつらなかくつたはりとのあとひさ

しくとゝまらは哥のさまをしりこ

とのこゝろをえたらむ人はおほそらの月

をみるかことくにいにしへをあふきていま

【一一才】

をこひさらめかも

【一二才】

白紙

【一二才】

古今和歌集卷第一 六十八首

春哥上

ふるとしにはるたちけるひよめる

大納言國信猶子兼平孫棟梁息十四首入

在原元方

六位

1としのうちにはるはきにけりひとゝせを
こそとやいはむことしとやいはむ
はるたちけるひよめる

木上頭 九十九首入

紀貫之

従五位上

2 そてひちてむすひしみつのこほれるを

【一二二】

はるたつけふのかせやとくらん

題しらす よみ人しらす

3 はるかすみたゝるやいつこみよしのゝ

よしのゝ山にゆきはふりつゝ

贈太政大臣長良女 清和女御 陽成院母后 高子内親王

二條の后のはるのはしめの御うた

4 ゆきのうちにはるはきにけりつくひすの

こほれるなみたいまやとくらん

題しらす よみ人しらす

5 むめかえにきゐるつくひすはるかけて

【一二三】

なけともいまた雪はふりつゝ

雪の木にふりかゝれるをよめる

凡僧 良少将宗貞息

素性法師

6 はるたては花とやみらんしら雪の

かゝれる枝につくひすのなく

題しらす よみ人しらす

7 こゝろさしふかくそめてしおりければ

きえあへぬゆきのはなとみゆらん

忠仁公

或人云さきのおほきおほいまうち君の哥也

【一二四】

二條の後の春宮のみやすんところと

きこえける時正月三日おまへにめ

しておほせことあるあひたに日はて

りながら雪のかしらにふりかゝりけ

るをよめたまひける

文屋康秀 縫殿助 三首入

ふむやのやすひて

六位

8 はるのひのひかりにあたるわれなれと

かしらの雪となるそわひしき

雪のふりけるをよめる

【一二五】

きのつらゆき

9 かすみたちこのめもはるのゆきふれは
はなゝきさともはなそちりける
はるのはしめによめる

從五位下安繩男言直一首入

ふち原のことなを

六位

10 はるやときはなやおそきときゝわかん
うくひすたにもなかつもあるかな
はるのはしめの哥

右衛門府生壬生忠孝三十四首入

みぶのたゝみね

六位

【一四ウ】

11 はるきぬとひとはいへともうくひすの
なかぬかきりはあらゝしと思ふ
寛平御時后の宮の哥合の哥

近院右大臣有能男 當純 一首入

源まさすみ

從五位下

12 たにかせにとくるこほりのひまことに

うちいつるなみやはるのはつ花

宮内少輔有朋男 大内記友則 四十五首入

紀とものり

六位

13 はなのかをかせのたよりにたくへてそ
うくひすさそふしるへにはやる

【一五オ】

左衛督參議音人息 兵部大丞 九首入

大江千里

六位

14 うくひすのたによりいつるこゑなくは
はるくることをたれかしらまし

業平一男 左衛門佐棟梁

在原むねやな

從五位上

15 はるたてとはなもにほはぬ山さとは
ものうかるねにうくひす^そなく

題しらす よみ人しらす

16 野へちかくいへゐしせれはうくひすの
なくなるこゑはあさなゝきく

【一五ウ】

17 かすかのはけふはなやきそわかくさの
つまもこもりわれもこもり

18 かすかのゝとふひのゝもりいてゝみよ
いまいくかありてわかなつみてん

19 みやまにはまつゆきたにきえなくに
みやこはのへのわかなつみけり

20 あつさゆみおしてはるさめけふゝりぬ
あすさへふらはわかなつみてむ

仁明御子 光孝天皇

仁和の御門みこにおましゝける時にひ

【一六オ】

一首入

とにわかなたまひける御哥

21 きみかためはるのゝにいてゝわかなつむ

わかころもてに雪はふりつゝ

哥たてまつれとおほせられし時よみ

てたてまつれる

つらゆき

22 かすかのゝわかなつみにやしろたへの

そてふりはへて人のゆくらん

題しらす 在原行平朝臣

阿保親王一男 中納言

【一六ウ】

23 はるのきるかすみのころもぬきをうすみ
山かせにこそ見たるへらなれ

寛平御時后宮の哥合によめる

光孝天皇孫 弍品是忠親王男 六首入

源むねゆきの朝臣

左京大夫

24 ときはなるまつのみとりも春くれは

いまひとしほのいろまさりけり

哥たてまつれとおほせられし時

によみてたてまつれる

つらゆき

【一七オ】

25 わかせごかころはるさめふることに

のへのみとりそいろまさりける

26 あをやきのいとよりかくるはるしもそ

みたれてはなのほころひにける

「ころ」の下「も」脱か。

西大寺のほとりの柳をよめる

柏武孫大納言良肇安世八男 十七首入
僧正遍昭

俗名右少将藏人頭宗貞

27 あさみとりいとよりかけてしら露を

たまにもぬけるはるのやなきか

題しらす よみ人しらす

【一七ウ】

28 もゝちとりさへつるはるはものことに

あらたまれともわれそふりゆく

29 おちこちのたつきもしらぬ山なかに

おほつかなくもよふことりかな

かりのこゑをきゝてこしへまかりけ

る人をおもひてよめる

甲斐少目 五十八首入

凡河内躬恒

従五位下

30 はるくれはかりかへるなりしら雲の

みちゆきふりにことやつてまし

【一八オ】

帰鴈をよめる

大和守藤原繼蔭女 廿一首入
伊勢

31 はるかすみたつを見すてゝゆくかりは

はなゝきさとにすみやならへる

題しらす よみ人しらす

32 おりつれはそてこそにほへむめのはな

ありとやこゝにうくひすのなく

33 いろよりもかこそあはれとおもほゆれ

たかそてふれしやとのむめそも

【一八ウ】

34 やとちかくむめのはなうへしあちきなく

まつ人のかにあやまたれけり

35 むめのはなたちよるはかりありしより

人のとかむるかにそしみぬる

むめのはなをおりてよめる

源常 左大臣左大将 嵯峨第三御子

東三條左のおほいまうち君

36 うくひすのかさにぬうといふむめのはな

おりてかさゝむおひかくるやと

題しらす 素性法師

【一九才】

37 よそにのみあはれとそみしむめのはな
あかぬいるかはおりてなりけり

むめのはなをおりて人におくり
ける ともりの

38 きみならてたれにかみせむむめのはな
いろをもかをもしるひとそしる

くらふ山にてよめる

つらゆき

39 むめのはなにほふはるへはくらふやま

【一九才】

やみにこゆれとしくそありける

つきよにむめのはなをおりて人
のいひければおるとてよめる

みつね

40 つきよにはそれとも見えすむめのはな
かをたつねてそしるへかりける

はるのよむめのはなをよめる

41 はるのよのやみはあやなしむめのはな

いろこそ見えねかやはかくるゝ

【二〇才】

泊瀬にまゝづつることにやとりける人
の家ひさしくやとらてほとへての

ちにいたれりければかのいへのある
しかくさたかなむやとりはあるといひ

いたして待ければそこにたてりけるむ
めのはなをおりてよめる

つらゆき

42 人はいさゝるもしらすふるさとは

はなそむかしのかにほひける

【二〇才】

水のほとりにむめのはなのさけりけ

るをよめる 伊勢

43 はることになかるゝかはをはなとみて

おられぬみつに袖やぬれなむ

44 としをへてはなのかゝみとなるみつは
ちりかゝるをやくもるといふらん

家にありけるむめのはなのちりける

をよめる つらゆき

45 くるとあくとめかれぬものをむめの花

【二一才】

ニケム

いつのひとまにうつろひぬらむ

寛平御時后宮の歌合の歌

よみ人しらす

46 むめかゝをそてにうつしてとめては

はるはすくともかたみなまし

素性法師

47 ちると見てあるへきものをむめのはな

うたてにほひのそてにとまれる

題しらす　よみ人しらす

【二二ウ】

48 ちりぬともかをたににほへむめのはな

こひしき時のおもひてにせむ

人のいへにうへたりけるさくらのは

なさきはしめたりけるをみてよめる

つらゆき

49 ことしよりはるしりそむるさくらはな

ちるといふことはならはさならなむ

題しらす　よみ人しらす

50 山たかみ人もすさめぬさくらはな

【二二才】

いたくなわひそわれみはやさん

又はさとゝをみ人もすさめぬ山さくら

51 やまさくらわか身にくれははるかすみ

みねにもをにもたちかくしつゝ

文徳后　清和母后　忠仁公女　明子　号五條后

そめとのゝ后のおまへにはなかくみに

さくらはなをさゝせたまへるをみ
閑院左大臣冬嗣二男　忠仁公

てよめる　さきの大きおほいまうち君

52 としふればよはひはおひぬしかはあれと

はなをし見ればものおもひもなし

【二二ウ】

なきさの院にて桜をみてよめる

四品阿保親王第五男母柏武第八女伊登内親王廿九首入

在原業平朝臣

従四位上藏人頭

53 世の中にたえてさくらのなかりせは

はるのこゝろはのとけからまし

題しらす よみ人しらす

54 いしはしるたきなくもかな山さくら

たおりてもこむみぬ人のため

山のさくらをみてよめる

そせい法師

【二三才】

55 みてのみや人にかたらむさくらはな

てことにおりていへつとにせむ

花さかりに京を見やりてよめる

56 見^たせはやなきさくらをこきませて

みやこそはるのにしきなりける

さくらはなのもとにてとしのおひ

ぬることをなきてよめる

とものり

57 いろもかもおなしむかしにさくらめと

【二三才】

としふる人そあらたまりゆく

おれるさくらをよめる

つらゆき

58 たれし：かもとめておりつるはるかすみ

たちかくすらん山のさくらを

哥たてまつれとおほせられし

ときよみてたてまつれる

59 さくらはなさきにけらしなあしひきの

山のかひよりみゆるしら雲

【二四才】

寛平御時后の宮の哥合歌

とものり

60 みよしのゝ山へにさけるさくらはな

雪かとのみそあやまたれける

伊勢

61 さくらはなはるくはわれるとしたにも

人のこゝろにあかれやはせぬ

さくらはなはなはさかりにひさしくとは

さりける人のきたりける時によみ

【二四才】

ける よみ人しらす

62 あたなりとなにこそたてれさくらはな

としにまれなる人もまちけり

返し　なりひらの朝臣

光孝第二御子

63 けふこすはあすはゆきとそふりなまし

きえすはありとはなと見ましや
トモ

亭子院哥合時よめる

伊勢

題しらす　よみ人しらす

64 ちりぬれはこふれとしるしなきものを

けふこそさくらおらはをりてめ

68 みる人もなきやまさとのさくらはな

ほかのちりなむのちそさかまし

【二五才】

65 おりとはおしけにもあるかさくらはな

いさやとかりてちるまてはみむ

古今和歌集卷第二　六十六首

春哥下

題しらす　よみ人しらす

69 はるかすみたなひくやまのさくら花

うつろはむとやいろかはりゆく

70 まてといふにちらてしとまるものならは

なにをさくらにおもひまさまし

71 のこりなくちるそめてたきさくらはな

ありてよの中はてのうければ

宮内少輔　有朋　二首入
きのあるとも
従五位下

66 さくらいろにころもはふかくそめてきん

はなのちりなむのちのかたみに

さくらはなのさきにけるを見に

まうてきたりける人によみておく

りける　みつね

67 わかやとのはなみかてらにくる人は

【二五ウ】

ちりなむのちそこひしかるへき

【二六ウ】

72 このさとにたひねしぬへしさくらはな

ちりのまかひに家ちわすれて

73 うつせみの世にもにたるかさくらはな

さくと見しまにかつちりにけり

僧正遍昭におくりける

文徳第一御子 惟高 二首入
これたかの御子

74 さくらはなちらはちらなむちらすとて
ふるさと人のきても見なくに

雲林院にてさくらの花ちりけるをみて

【二七才】

よめる
そうく法師 承均
三首入

75 さくらちるはなところははるなから

雪そふりつゝきえかてにする

桜の花のちりけるを見てよめる

そせい法師

76 はなちらすかせのやとりはたれかしる

われにおしへよゆきてうらみむ

うりむ院にて桜の花をよめる

そうく法師

【二七ウ】

77 いさくらわれもちりなんひとさかり
あひしれりける人につきめ見えなむ

あひしれりける人のまうてきてかへ

りにけるのちによみて花にさして

つかはしける つらゆき

78 ひとめみしきみもやくるとさくらはな
けふはまち見てちらはちらなむ

山の桜を見てよめる

79 はるかすみなにかくすらんさくらはな

【二八才】

ちるまでたにも見るへきものを

心ちそこなひてわつらひける時に風に

あたらしとておろしこめてのみ侍ける

あひたにおれるさくらのちりかたにな

れりけるをみてよめる

尼敬信 典侍因香

三首入

藤原のよるかの朝臣

80 たれこめてはるのゆくゑもしらぬまに

まちしさくらもちりはてにけり

東宮の雅院にて桜の花の御河水にち

【二八ウ】

りて流けるをみてよめる

菅野高世

一首入

すかのゝたかよ
六位

81 枝よりもあたにちりにしはなれは
おちても水のあはとこそなれ

桜の花のちりけるをよめる

貫之

82 ことならはさがすやはあらぬさくら花
見るわれさへにしつこころなし

さくらのことくちるものはなしと人の

【二九才】

いひければよめる

83 さくらはなとくちりぬともおもほえず
人のこころそかせもぶきあへぬ

さくらはなちるをみてよめる

きのとものり

84 ひさかたのひかりのとけきはるのひに
しつこころなくはなのちるらむ

春宮のたちわきのちむにて桜の花
のちるをよめる

【二九ウ】

左近少将滋貫男 出羽介 良風 一首入
藤原よしかげ
従五位下

85 はるかせははなのあたりをよきてふけ
こころつからやうつるふとみむ

さくらのちるをよめる

凡河内みつね

86 ゆきとのみふるたにあるをさくらはな
いかにちれとかかせのふくらむ

ひえにのほりてかへりまうてきてよ

める つらゆき

【三〇才】

87 山たかみつゝわかこしさくらはな
かせはこころにまかすへらなり

題しらす

大伴のくろぬし

黒主 三首入
六位

88 はるのあめのふるはなみたかさくらはな
ちるをおしまぬ人しなれは

亭子院哥合哥

89 さくらはなちりぬるかせのなこりには

みつなきそらもなみそたちける

ならの御かこの御哥 一首入

【三〇ウ】

90 ふるさとなりにしならのみやこにも

いろはかはらずはなはさきけり

はるの哥とてよめる

よしみねのむねさた

91 はなのいろはかすみにこめてみせすとも

かをたにぬすめはるの山かせ

寛平御時后宮の哥合歌

そせい法師

92 はなの木もいまはほりうへしはるたては

【三一オ】

うつろふいろに人ならひけり

題しらす

よみ人しらす

93 はるのいろのいたりいたらぬさとはあらし

さけるさかさはなのみゆらむ

はるの哥とてよめる

つらゆき

94 みわやまをしかもかくすかはるかすみ

人にしられぬはなやさくらむ

深草御門御子

雲林院の御子のもとにはなみにきた

【三二ウ】

山のほとりにまかれりける時によめる

そせい

95 いさけふははるの山へにましりなん

くれなはなけのはなのかけは

「かけ」の下「か」脱か。

はるの哥とてよめる

96 いつまでかのへにころのあくかれん

はなしちらすはちよもへぬへし

題しらす

よみ人しらす

97 はることにはななさかりはありなめと

【三二オ】

あひみむことはいのちなりけり

98 はなのことよのつねならはすくしてし

むかしは又もかへりきなまし

99 ふくかせにあつらへつくるものならは

このひととはよきよといはまし

100 まつひとこぬものゆへにくくひすの
なきつるはなをおりてけるかな

寛平御時后の宮の哥合歌

皇后宮亮興時孫^イ 相模守道成息 興風

藤原おきかせ

六位

【三二ウ】

101 さくはなはちくさなからにあたなれと
たれかははるをうらみはてたる

102 はるかすみいろのちくさに見えつるは

たなひくも山のはなのかけかも 「ひくも」の「も」衍字か。

在原元方

103 かすみたつはるの山辺はとをけれと

ふきくる風ははなのかそする

うつるへるはなを見てよめる

みつね

【三三才】

104 はなみれはこゝろさへにそうつりける
いろにはいてし人もこそしれ

題不知 よみ人しらす

105 うくひすのなくのへことにきてみれば

うつるふはなにかせそふきける

106 ふくかせをなきてうらみよくひすは

われやはなにてたにふれたる

ナイシノカミ アマネイコ 一首入

典侍治子朝臣

107 ちるはなはななくにしとまるものならば

【三三エ】

われうくひすにおとらましやは

仁和の中將のみやすむところの家に哥

合せむとしてしけるときによみける

中納言有穂二男 左近中将 一首入

藤原のちかけ

從五位

108 はなのちることやわひしきはるかすみ

たつたの山のうくひすのこゑ

鶯のなくをよめる

そせい

109 木つたへはおのかはかせにちるはなを

【三四才】
たれにおほせてこゝらなくらん

つくひすのはなの木にてなをよめる

みつね

110 しるしなきねをもなくなつくひすの

ことしのみちるはなならなくに

題しらす

よみ人しらす

へ

111 こまなめていさみにゆかむふるさとは

ゆきとのみこそはなはちるらめ

112 ちるはなをなにかうらみむ世の中に

【三四ウ】

わか身もともにあらむものかは

出羽郡司小野良家女 十七首入
小野少町

113 はなのいるはうつりにけりないたつらに

わか身よにふるなかもせしまに

仁和の中將のみやすんところの家に

哥合せむとしける時によめる

そせい法師

114 おしとおもふころはいとによられなん

ちるはなことにぬきてとゝめむ

【三五オ】

志かの山こえに女のおほくあへりける

によみてつかはしける

つらゆき

115 あつさゆみはるの山へをこえくれは

みちもさりあへすはなそちりける

寛平御時きさいの宮の哥合の哥

116 はるのゝにわかなつまむとこしものを

ちりかふはなにみちはまとひぬ

山寺にまうてたりけるによめる

【三五ウ】

117 やとりしてはるのやまへにねたるよは

ゆめのうちにもはなそちりける

寛平御時きさいの宮の哥合の哥

118 ふくかせとたにのみつとしなかりせは

みやまかくれのはなをみましや

志かよりかへりけるをうなともの花

山にいりてふちのはなのもとにたち

よりて帰けるによみておくりける

僧正遍昭

【三六才】

119 よそに見てかへらむ人にふちのはな

はひまつはれよえたはあるとも

家にふちのはなさけりけるを人の

たちとまりて見けるをよめる

みつね

120 わかやとにさけるふちなみたちかへり

すきかてにのみ人のみゆらむ

題不知 よみ人しらす

121 いまもかさきにほふらむたちのはな

の

【三六ウ】

こしまかさきの山ふきのはな

122 はるさめにほへるいろもあかなくに

かさへなつかし山ふきのはな

123 山ふきはあやなさきそはなみむと

うへけむきまかこよひになく

吉野河のほとりに山ふきのさけり

けるをよめる

つらゆき

124 よしのかはきしの山ふきふくかせに
【三七才】

そのかけさへうつるひにけり

題しらす よみ人しらす

125 かはつなくゐての山ふきちりにけり

はなのさかりにあはましものを

贈太政大臣 嵯峨后父

この哥はある人の云橘清友が哥也

春哥とてよめる

そせい

126 おもふとちはるの山へにうちむれて

そこともいはぬたひねしてしか

【三七ウ】

又はあはれてふことをかれいにつゝみもて

はるのとくすぐるをよめる

みつね

127 あつさゆみはるたちしよりとし月の

いるかこくもおもほゆるかな

やよひにつくひすのひさしつきこえ

さりけるをよめる

つらゆき

128 なきとむるはなしなければつくひすも

【三八才】

はてはものうくなりぬへらなり

やよひのつこもりかたに山をこえ

けるに山かはよりはなのなかれける

をよめる

大蔵允 清原深養父

ふかやぶ

従五位下

129 はなちれるみつのまにくとめくれは

山にははるもなくなりにけり

はるをしみてよめる

もとかた

【三八ウ】

130 おしめともとまらなくにはるかすみ

かへるみちにしたちぬとおもへは

寛平御時後の宮の哥合歌

131 こゑたえすなけやうくひすひとせに

ふたゝひとたにくへきはるか

やよひのつこもりのひはなつみより

かへりける女ともをみてよめる

みつね

132 とゝむへきものとはなしにはかなくも

【三九才】

ちるはなことにたくふこゝろか

やよひのつこもりのひあめのふりけ

るに藤のはなをゝりて人につかはし

ける なりひらの朝臣

133 ぬれつゝそしゑておりつるとしのうちに

はるはいくかもあらしとおもへは

亭子の院の哥合のはるのはて

の哥

みつね

【三九ウ】

トノミ

134 けふのみとはるをおもはぬときたにも

たつことやすきはなのかけかは

【四〇才】

古今和歌集巻第三

夏哥

題不知　よみ人しらす

135 わかやとのいけのふちなみさきにけり

山ほとゝきすいつかきなかむ

この哥或人云柿本人丸か也

うつきにさけるさくらをみてよめる

利

彈正大弼　俊貞　四首入

きのとしさた

從五下

136 あはれてふことをあまたにやらしとや

【四〇ウ】

はるにおくれてひとりさくらむ

題しらす　よみ人しらす

137 さつきまつやまほとゝきすうちはふき

いまもなかなむこそそのふるこゑ

伊勢

138 さつきこはなきもふりなむほとゝきす

またしきほとこのこゑをきかはや

よみ人しらす

139 さつきまつはなたちはなのかをかけは

【四一才】

むかしの人のそてのかそする

140 いつのまにさつきゝぬらむあしひきの

山ほとゝきすいまそなくなる

141 けさきなきいまたゝひなるほとゝきす

はなたちはなにやとはからなむ

をとほ山をこえける時にほとゝきす

のなくをきゝてよめる

きのともものり

142 をとほやまけさこえくれはほとゝきす

【四一ウ】

こすゑはるかにいまそなくなる

ほとゝきすのはしめてなきけるをき

きてよめる　そせい

143 ほとゝきすはつこゑきけはあちきなく

ぬしさたまらぬこひせらるはた

ならのいそのかみてらにてほとゝきす

のなくをよめる

144 いそのかみふるきみやこのほとゝきす

こゑはかりこそむかしなりけれ

【四二才】

題しらす よみ人しらす

145 なつ山になくほとゝきすこゝろあらは

ものおもふわれにこゑなきかせそ

146 ほとゝきすなくこゑきけはわかれにし

ふるさとさへそこひしかりける

147 ほとゝきすなかなくさとのあまたあれば

なをうとまれぬおもふものから

148 おもひいつるときはの山のほとゝきす

からくれなゐのふりてゝそなく

【四二ウ】

149 こゑはしてなみたはみえぬほとゝきす

わがころもてのひつをからなむ

150 あしひきの山ほとゝきすおりはへて

たれかまさるとねをのみそなく

151 いまさらに山へかへるなほとゝきす

こゑのかきりはわかやとになけ

惟高御子御 小野小町一腹姉

みくにのまち

152 やまやまて山ほとゝきすこゝろつてん

われよの中にすみわひぬとよ

【四三才】

寛平御時后の宮の哥合歌

きのとものり

153 さみたれにものおもひをればほとゝきす

よふかくなきていつちゆくらん

154 夜やくらきみちやまとへるほとゝきす

わかやとをしもすきかてになく

大江千里

155 やとりせしはなたちはなもかれなくに

なとほとゝきすこゑたえぬらん

【四三ウ】

きのつらゆき

156 なつのよはふすかとすればほとゝきす

なくひとこゑにあくるしのゝめ

みふのたゝみね

157 くるゝかとみればあけぬるなつのよを

あかすとやなくやまほとゝきす

紀秋峯

二首入

「御子御」の下
擦消し跡あり。
母を消したか。

158 夏山にこひしきひとやいりにけむ

こゑふりたてゝなくほとゝきす

【四四才】

題しらす よみ人しらす

159 こそのなつなきふるしてしほとゝきす

それがあらぬかこゑのかはらぬ

ほとゝきすのなくをきゝてよめる

つらゆき

160 さみたれのそらもゝとゝろにほとゝきす

なにをうしとかよたゝなくらん

さぶらひにておのこゝものなけたう

へけるにめしてほとゝきすまつ哥よめ

【四四ウ】

とありければよめる

みつね

161 ほとゝきすこゑもきこえず山ひこは

ほかになくねをこたえやはせぬ

山にほとゝきすのなきけるをきゝ

てよめる つらゆき

162 ほとゝきす人まつ山になくなれば

われうちつけにこひをられけり

はやくすみける所にて時鳥のなきける

【四五才】

をきゝてよめる たゝみね

163 むかしべやいまもこひしきほとゝきす

ふるさとしもなきてきつらん

ほとゝきすのなきけるをきゝてよめる

みつね

164 ほとゝきすわれとはなじにつつはなの

うきよのなかになきわたるらん

はちすのつゆをみてよめる

僧正遍昭

【四五ウ】

165 はちすはのにこりにしまぬこゝろもて

なにかは露をたまとあさむく

月のおもしろかりけるよあかつきかたによ

める ふかやふ

166 なつのよはまたよひなからあけぬるを

くものいつくにつきやとるらん

となりよりとこなつのはなこひにお
こせたりければおしみてこの哥をよ
みてつかはしける

【四六才】

みつね

¹⁶⁷ちりをたにすへしとそおもふさきしより

いもとわかぬるゝとこなつのはな

みなつきのつこもりのひよめる

¹⁶⁸なつとあきとゆきかふそらのかよひちに

かたへすゝしきかせやふくらん

六、異同一覧

孤例

〔四才〕 5 行目「ほにいたすへきところ」他本は「いたすへ

き事」「いたすへき」等。

〔五才〕 9 行目「(を)こり」他本全て「をこりて」。

〔六才〕 7 行目「万えう」他本全て「万えうしふ」。

〔一〇才〕 7 行目「とゝまらは」他本は「とゝまれらは」等。

〔二二才〕 1 行目「たににほへ」他本全て「たにのこせ」。

〔三三才〕 6 行目「山さくら」他本全て「さくらはな」。

〔二三才〕 1 行目「あらたまりゆく」他本全て「あらたまりける」。

〔二四才〕 5 行目「伊勢」の前に諸本詞書「やよひにうるふ月

ありける年よみける」有。

〔二五才〕 6 行目「さきにける」他本は「さけりける」等。

〔二六才〕 9 行目「花ちり」他本は「はなのちり」等。

〔二八才〕 1 行目「ちるまで」他本全て「ちるまを」。

8 行目「ちりはて」他本全て「うつろひ」。

〔三〇才〕 4 行目「はるのあめ」他本は「はるさめ」等。「はる

のあめ」と読むのが確実なものとしては、孤例。

〔三八才〕 3 行目諸本作者を藤原興風とする。

〔四四才〕 8 行目「をられけり」他本全て「まさりけり」。

〔四五才〕 7 行目「とこなつのはな」他本全て「とこなつのは

なを」。

定家本と異なるもの

〔六才〕 3 行目「おほきみみつのくらぬ」貞嘉伊「おほ

きみつのくらぬ」。元、雅、前、昭と同。

〔一〇才〕 2 行目「あすか河せ」貞嘉伊「あすか河のせ」。

〔二二才〕 3 行目「たゝる」貞嘉伊「たてる」。元、公と

同。

〔二〇ウ〕 1行目「むめのはなの」貞、嘉、伊、「むめのはな」。

元、雅、前、昭、公と同。

〔二二ウ〕 2行目「おもひて」貞、嘉、伊、「おもひいて」。雅、

前と同。

〔二四ウ〕 6行目「きえずはありと」貞、嘉、伊、「きえずは

ありとも」。前、元、公と同。

〔二六ウ〕 3行目「さくらはな」貞、嘉、伊、「はなさくら」

元、雅、公と同。

5行目「におくりける」貞、嘉、伊、「によみておく
りける」。

〔二七ウ〕 4行目「ちりけるを」貞、嘉、伊、「ちりはへりける

を」。元、前と同。

4行目「よめる」貞、嘉、伊、「よみける」。元、雅
と同。

〔二八ウ〕 5行目「よめる」貞、嘉、伊、「よみける」。元と同。

〔二九ウ〕 4行目「ちるをみてよめる」貞、嘉、伊、「ちるをよ

める」。

〔三〇ウ〕 6行目「亭子院哥合哥」下に、貞、嘉、伊、「つらゆ

き」あり。雅、前、公と同。

8行目「そも」貞、嘉、伊、「そらに」。公と同。

〔三四ウ〕 7行目「せせい法師」貞、嘉、伊、「せせい」。

〔三六ウ〕 1行目「こしまかさき」貞、嘉、伊、「こしまのさ

き」。

〔三七ウ〕 1行目「又は」以下の一文、貞、嘉、伊はなし。元、

雅、前、昭と同。

6行目「うくひすの」貞、嘉、伊、「うくひすのこえ
の」。雅と同。

〔四一ウ〕 9行目「ふりて」そ、貞、嘉、伊、「ふりいでそ」

元、前、昭と同。

〔四三ウ〕 2行目「なつのよは」貞、嘉、伊、「なつのよの」。公、

と同。

〔四六ウ〕 5行目「かよひちに」貞、嘉、伊、「通路は」。前、元、

公と同。

定家本内で揺れのあるもの

〔一〇ウ〕 7行目底本、貞、嘉、「さまを」伊、「さまをも」

〔二三ウ〕 5行目底本、貞、嘉、「うくひすのなく」伊、「うく
ひすそなく」

〔二七ウ〕 5行目底本、貞、伊、「こしへ」貞、「こしに」。

底本、貞、嘉、「まかりける」伊、「まかりにける」。

〔二二二ウ〕 8行目底本、嘉、伊、「さきにけらしな」貞、「けらしも」。

〔三六才〕 3行目底本、貞、「ふちのはな」嘉、伊、「ふちのはな」。

〔四一ウ〕 3行目底本、嘉、伊、「よめる」貞はなし。

〔四四才〕 1行目底本、貞、伊、「題しらす」嘉はなし。

〔四五ウ〕 6行目底本、嘉、「いつく」貞、伊、「いつこ」。

注

注1 売札に「胡蝶装」とあるが、形態からするに、綴葉装を胡蝶装と呼んだものとみられる。

参考文献

- 『弘文荘善本目録』反町茂雄編、弘文荘、一九七七年
『冷泉家時雨亭叢書 第二巻』冷泉家時雨亭文庫編、朝日新聞社、一九九四年
『伝藤原公任筆 古今和歌集 図版編・解説編』小松茂美編、旺文社、一九九五年
『古今和歌集 伊達本 藤原定家筆』久曾神昇編、笠間書院、二〇〇五年
『古今和歌集成立論 資料編上・中・下』久曾神昇著、風間書房、一九六〇年
『古今和歌集成立論 研究編』久曾神昇著、風間書房、一九六一年

『古今集の伝本の研究』西下経一著、明治書院、一九五四年

『古今集校本 新装ワイド版』西下経一・滝沢貞夫編、笠間書院、二〇〇七年

附記

本学古今和歌集の調査にあたり、日本文学科の金子彰先生、鉄野昌弘先生、今井久代先生にご指導頂いた。また、久保田淳先生には原本を見て頂き、格別のご指導を賜った。この場を借りて篤く御礼申し上げます。

なお、当研究会の活動は、東京女子大学学生会より「学生研究奨励費」の交付を受けて行っているものである。

東京女子大学古典文学研究会

本稿は研究会員の瀧口翠、中嶋静香（五十音順）が作成した。
また、以下の会員が本稿の翻刻・調査に関わった。

石川えみ、石綿咲希、今村由佳、鵜飼祐江、薄葉安紀子、川西瑞恵、清原有貴、工藤京子、桑垣幸枝、古渡咲衣、栗原香織、利根川春菜、橋立亜矢子、福土貴子、横山文、鷲谷みどり、渡邊舞
（五十音順）